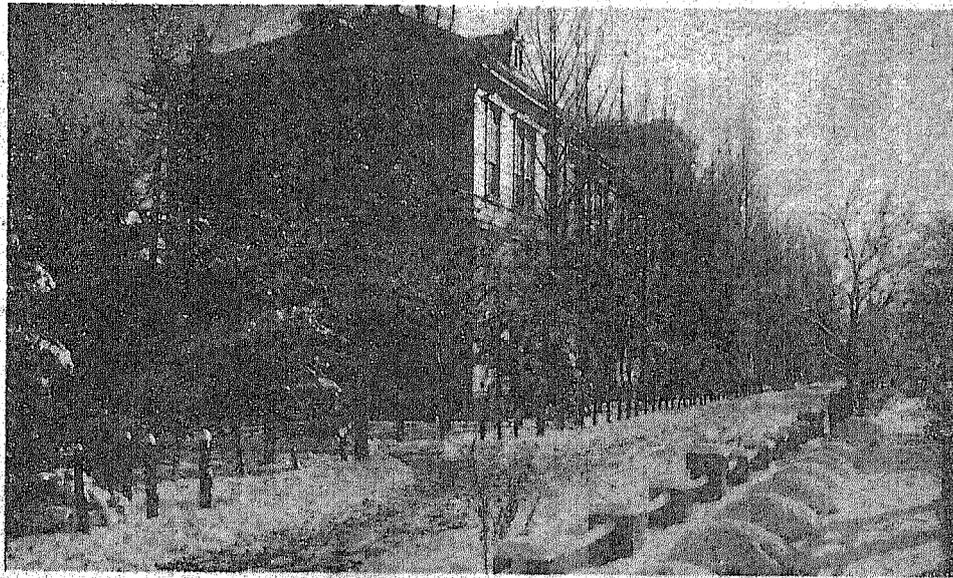


報會曲千

日五十二月一年七十和昭

號三十第

會曲千人法團社



校母の、雪初

目次

- △初雪の母校……………(一)
- △重大時局を前に昭和十七年
を迎え我輩絲業を思ふ……………井上柳梧(二)
- △決戦態勢に下げる我輩絲業
の任務と將來への展望……………蒲生俊興(四)
- △第二十九回卒業證書授與式……………(五)
- △母校便り……………(六)
- 教練査閲
- 甘茶美術展覽會
- 映畫班記事
- 修道班記事
- 職員常會
- △本會記事……………(六)
- 本會日誌
- 千曲會新役員歡迎會
- 北信支會役員改選
- △遠藤保太郎先生退官
記念品贈呈資金募集……………(七)
- △統後資金應募者……………(七)
- △會費領收……………(八)
- △敍任辭令……………(八)
- △社團法人千曲會第二回總會……………(九)
- 總會次第
- 總會出席者氏名
- 議事
- △昭和十五年度千曲會
收支決算表……………(九)
- △昭和十七年度千曲會
收支決算表……………(一〇)
- △新制會費納入回数と
一時金の關係表……………(一一)
- △基本財産表……………(一二)
- △支會通信……………(一三)
- 栃木支會便り……………(一四)
- △計報……………(一四)
- 死亡者氏名
- 弔慰金報告
- 遺族よりの禮狀
- 正木章三君の
想ひ出……………由井千幸
- △原稿募集……………(一五)
- △千曲會指定旅館案内……………(一六)

謹賀新年

昭和十七年元旦

井上柳梧
職員一同

上田蠶絲専門學校

謹賀新年

昭和十七年元旦

在校千曲會員一同

重大時局を前に昭和十七年を 迎へて我蠶絲業を思ふ

井上柳梧

昭和十六年十二月八日午前十一時四十五分米英に對する宣戰布告に當りての詔書、長くも煥發せられ國民に對し米英に對する開戰の理由を御示し下され國民の進むべき道を御諭し下されたのである。吾々臣民は誠に恐惶感激に堪えぬ次第である。吾々は各其職場に於て最善の努力をして一億一心總力を擧げて此未曾有の國難を突破して、大御心を安んずらなければならぬのである。

暴戻備なき米英は亞細亞を自らの殖民地に考へ事々に我が國策たる大亞細亞共榮圏の建設の行動に反對し、剩へ資産凍結令を發して我國を經濟的に封鎖し所謂ABC D 線包圍陣を強化して軍事的に我に逼まらんとしたのである。

我國は世界平和を願ふ爲めに忍ぶべからざるを忍び、耐ふべからざるに耐え隱忍自重して今日に到つたのである。然しながら我國の存立を危殆に陥らしむる如き徒等の行爲に對しては黙する事能はず、我國は自存自衛を全くする爲めに斷乎として起つたのである。

宣戰の御詔書を拜したる上は吾々は敵國を撃滅して征戰の目的を達成せざれば止まないものである。

今回の戰爭は世界最大の海軍國を相手とするのであつて我國運を賭しての戰である。我々は必勝の信念を以て全力を擧げて國難を打破すべく突進しなければならぬ。幸なる哉、開戰第一日よりハワイ、シンガポール、ヒリツピン、香港、グロム等に於ての大勝の吉報頻りに來る。吾等實に雀躍歡喜に堪えないのである。是れにより我海軍の世界無敵なる事が世界各國人に深く知らされたのであつた。米英の強大さを以てしては假へ大敗を重ねても尙ほ捲土襲來する事期すべきである。從て

戰は長期に亘る事を覺悟しなければならぬ。吾々は常に緊張したる心構を以て聖戰の目的達成せらるゝ迄は萬難を排して邁進しなければならぬのである。

日支事變勃發して以來五ヶ年、皇軍は御稜威の下赫々たる武功を宣揚し向ふ所連戰連勝して今や四百餘洲を席巻して餘す所ないのである。北支より中支へ、中支より更に南支へと堂々武歩を進めた皇軍の威力により將政權は邊疆に壓迫せられ今日僅かに重慶に餘喘を保つのみ。之れに對して汪精衛氏指導の下に首都南京に遷都した新國民政府は漸次其基礎も鞏固となり、新東亞建設の一翼として我が國策に協力しつゝあり。更に皇軍は我が華國の大精神を顯實し八紘爲宇の大使命を達成せんが爲めに、遼く泰國、馬來半島に進軍しつゝあり。尙ほ太平洋の孤島ハワイにも進撃しつゝあり實に北は北滿より南太平洋を呑まんとする態勢は我國有史以來未曾有の大偉觀である。皇國の進展實に偉大なりと謂ふべきである。吾々一億一心となりて萬難を排して此難關を突破すれば我國の前途は洋々たる輝つて我蠶絲業を見るに米國の經濟壓迫により生絲は米國依存を脱却して、内需に向けるに到つたのである。米國は是れによりて日本が經濟上非常なる窮迫に陥ると思つたかとも知れないのであるが、幸ひ我國に於ては已に以前より是れに對する對策は出來て居つたのである。生絲の對米輸出杜絶前の數量は三十萬俵であつた、然し是れは數量的には別段問題では無いのであつて現在に於ては國內消費數量の方が一層大量を必要とする状態になつて居るのである。目下の我國蠶絲界に於ては羊毛の輸入、工業鹽等の資材輸入の困難な

る爲めに人造纖維の生産減少し國內纖維資源として蠶絲の地位は益々重きを加へつゝあるのである。

此關係より我蠶絲業の實體は何等微動だにしないのである。價格の點に於ても蠶絲統制法の實施によりて統制會社が生産費を基準とせる一定の價格にて繭、生絲を買ひ入れて保護されて居り配給統制機構も整備せられ消費部面の融通性も確立されて居るので蠶絲業は以前に比して全く安定せるものとなつたのである。我蠶絲業は過去十數年に亘る研究によつて新しき用途に向ひて其面目を一新したのである。吾々は先づ此方面に向ひて願ふことにする。

先づ生絲の國內用として進むべき新しき方面は羊毛に代はりて服地としての進出である。是れは已に各方面に於て多數の研究、試験が重ねられて最早實用方面に一步踏み出して居るのである。原料纖維を得る法に一粒繰法及開繭法がある尙ほ平面繭による法も是れに加へられるのである。

一粒繰法は尙ほ研究時代にあつて各一得一失あつて何れの法が最良であるか決定は出來ないのであるが、何れ其中には最も實用的なものが出来ると考へらるゝのである。開繭法にも切斷して開繭する法と養繭機の様な裝置を使用し開繭劑を加へて開繭する法と針を植へたる廻轉せる圓筒を備へたる開繭機による法とある。平面繭に於ても各種の形式がある。是れも今日尙ほ試験時代にあるのであつて蠶が吐絲を平面上に於て完全にする爲めには品種改良によりて是れに適應する品種の選出が必要と考へらるゝのである。此法は生繭を得る法としては便利であり尙ほ平面繭としての他の用途もあるのである。一粒繰法と開繭法とによりて何れが有利であるかに就きて愛知縣で行はれた試験によれば一粒繰の方が價格が安く開繭法では中間の損失が多く從て歩留

る。例へば其製品に就きて比較して見ると同じ規格のものを造るのに一メートルに就きて一圓から一圓五十錢位開法の方が高くなる。と謂ふ事である。製品の品質に就きては從來は開法によるものはネツプ多しして不良である。とされて居りしが法式の如何によりては可成の優良品も得られて居る。絹は強力が著しく勝つて居る爲めに是れを使用する時は堅牢度が増加するのである。即ちセリシヤン定着劑と羊毛との割合を色々變へて十番手の紡毛糸を作つて糸の強力を及之で織つた服地の強力を比較して見ると次の表の通りである。

混紡の割合		強 力	
絹	羊毛	一〇番單 糸一〇本	混紡 物糸
100	0	五、四一	二五、〇
80	20	四、九六	二三、〇
60	40	四、七九	二二、五
40	60	四、四二	二一、〇
20	80	三、九〇	一五、六
0	100	三、七〇	一四、八
		二、四九	一三、四

斯の如く絹は補強としても重要な役目を爲すものである。尚ほ毛の性質を得せしむる爲めにはセリシヤン定着が必要である。定着法としてはホルマリソ法とクロム法とが今日實地に行はれて居るがクロムの入手困難である爲め目下主としてホルマリソ法が行はれて居る。今日セリシヤン定着を行ふ工場は其數一一九に達し絹服地の製織する工場數は六四に達して居るが、尙ほ此外に多くの紡績會社が絹毛糸の製造に當つて居る。此の如き情勢にあるを以て絹の此方面の需要は益々増加しつゝあるのである。此外に主要なる新しき絹の用途を擧げて見れば次の様である。

絲類としては特太絲、無抱合絲、絹絹絲、人造テグス等がある。特太絲の製造には特種の機械も考案せられ以前は偏平なりしものが斷面圓形に近い絲が得られ又絲質粗硬なりしものがレシヤン溶液を使用する事によつて柔軟性を附與する事が出来得る様になつたのである。無抱合絲は直接服地に使用すれば特種の風味ある織物が得られ又是れより容易に短織絹が得らるゝのである。絹絹絲は直に服地に使用せられ是れによりて優良なる服地が得られ又毛糸の如き太い絹絹絲も容易に造り得らるゝものである。此絲は特種機械による爲めに其外觀は著しく毛糸に似て居るのである。人造テグスは生絲を數十本引揃へ之に撚を施したものを五〇%のゼラチン液の中に加熱してゼラチンを絲織の間隙に充分浸潤せしめ後過剰のゼラチンを去り、更にホルマリソ液にてゼラチンを凝固させて不溶性としたもので釣絲又は豚毛、馬毛等に代用せらるゝのであつて是等豚毛不足の今日其用途も多いのである。次に絹網がある從來使用されたる絹網と比較すると海水中にて耐久性が大であり漁獲率は高く重さは少く水切れ良く取扱が便利である。尙ほ絹絲は絹絲に比して海水中に入りたる時其太さの増加率は少く強力の減退も亦少いのである。かゝる特徴を有する爲め絹の此方面の需要も益々増加するものと考へらるゝのである。絹皮革に就いて見れば、絹は其強力の大であるから是れを以て皮革を造る時は強くして軽い製品が得らるゝ爲めに特種の用途がある製造法も益々改良が加へられ品質も向上しつゝあるのである。絹皮革を製造しつゝある所は三十三個所もある。養蠶副産物の利用も最近大に研究進歩したのである。次に其主なるものを擧げて見よう。蠶沙は綿羊の飼料として有効である。即ち是れによりて毛は優良となり双生兒を生む事

が増加するのである。農林省蠶絲試驗場の實驗によれば對照區は八頭中一頭の親が双生兒を生みたるに對し蠶沙區の方は八頭中六頭の親が双生兒を生んだのである。尙ほ綿羊一頭への飼育には一ヶ年蠶沙五五〇疋を要すると謂ふから我國の蠶沙全部を綿羊飼育に向ける事が出来るとすれば三〇〇萬頭の綿羊を飼育し得る事となる。今假りに三分の一とするも一〇〇萬頭を飼育し得る事となるから今日の飼料不足の状態に於ては大なる資源と謂はねばならぬのである。綿羊一頭の一ヶ年の厩肥生産量は一五〇〇疋であつて、其厩肥含有量を〇、六%とすれば三〇〇萬頭分の厩肥は二七〇〇、五疋であるから全國五〇萬町歩の桑園の所要厩肥の二四%を綿羊厩肥を以て支辨する事が出来得ると謂ふ事になる。是等も亦大に考慮すべき問題と思はれるのである。蠶沙の約半量を占むる蠶糞は是れ又全國的に考ふれば相當の量に達するものである。蠶糞の利用に就きては活性炭素の製造がある。是れは蠶糞の構造上非常に優良なる製品が得らるゝのである活性炭素は脱色用、醫藥用、瓦斯吸收用、觸媒用、瓦斯マスク製造用として其用途の廣いものである。尙ほ營蠶前の赤糞はヒスチヂンの原料として役立つ事が出来得るのである。ヒスチヂンは胃潰瘍の特効藥として貴重なるものである。蠶は從來製油及魚鰯の餌料、肥料として利用されたのであるが、最近農林省蠶絲試驗場の小柳技師によりてビタミンB₂の含量が他に無き程多くビタミンB₂の原料として非常に貴重なるものである事が發見せられ其の價値が頗る高まつたのである。ビタミンB₂は生長促進營養を改善するビタミンにして營養上非常に重要なものである。從來取は豚肝臓及酵母中に多いと謂ふ事が知られて居つたのである。今是等のものゝ中に含有せらるゝビタミンB₂の量を比較して見ると一疋中豚肝臓中には二

〇、四疋乾燥酵母中には二、三疋であるが乾燥蛹中には實に一八五、〇疋で約九倍に當つて居るビタミンB₂の純粋なる製品は非常に高價であつて獨逸メルク製は一五、一三九二圓である。此の如く貴重なる資料を多量有する點より蠶が絹より高價となる事もあり得ない事は無いと思はれるのである。蠶絲業は今や我國に取りては實に重要な産業となつたのである。此の如く一つの産業は是れに従事する人の献身的努力と研究によりて興隆し盛大となるものである。是れに反して産業者が努力もせず研究も怠り居れば有望なる産業も自ら衰退するものである。今や我國は南進又南進大東亞共榮圈建設の爲めに一億一心となつて邁進しつゝあり、由來亞細亞は絹絲の産地として世界に冠する所である。我國は家蠶の外に柞蠶、天蠶、栗虫、ヒマ蠶及楓蠶あり滿洲國に柞蠶あり、中華民國に家蠶、柞蠶、楓蠶あり。印度、ビルマには家蠶、印度柞蠶、ムガー、エリリ等多數の野蠶が生存するのである。是等多數の絹絲類及其副産物を利用して大東亞共榮圈内の民族は勿論其他の世界人類の福利を計るは實に吾々に課せられたる任務と謂はなければならぬ。吾々は是れを思ふ時我蠶絲關係者の前途は實に洋々たる。同時に其責務も重且つ大なりと考へざるを得ないのである。大東亞共榮圈内の諸國に於ては絹以外に他の纖維原料も多いのである即ち我國に麻及亞麻滿洲國及北支に於ける亞麻及綿、蒙疆の羊毛其他の毛類、比島のマニラ麻、印度及ビルマ地方の綿及黃麻、南洋諸島のサイタサル麻等算へれば其數及量は莫大なりと謂ふべきである。吾々は絹と共に是等各種纖維の利用をも考へなければならぬ。茲に大戰の中に最も意義深き昭和十七年を迎ふるに當り我蠶絲業の將來を考へ吾々の責務の重大なるを思ひ諸君と共に協力一致し我國の爲め奮然として努力邁進せんとする決意を新にするものである。

決戦態勢下に於ける

我が蠶絲業の任務と將來への展望

蒲生俊興

久しきに亘る敵性國家の他なき暴戾に對する我國の隱忍自重も終に破れて、愈々來る可き段階に突入するに至つた。夙くも各重要地點に於て赫々たる戦果を收め、萬國人を只啞然たらしめ我が國威を世界の隅々迄轟るかを得たのは寔に御稜威の下一億國民の團結と無敵海陸空軍の電撃作戰に因る決死的奮闘の賜物であり、我等の感謝感激に堪へざる所である。

顧るに過去數十年間我が蠶絲業の唯一顧客たりし米國も、英帝國の東洋退散を奇貨とし極東制覇の夢想に驅られ、全く無謀なる對日政策に禍ひせられ、數十年來の親交を反古にし、一舉にして日獨伊の挾撃を受けねばならぬとは何たる頑迷さよ。

されば吾が蠶絲業はその黄金時代に於て最終生産物たる生絲の八五%をアメリカに提供し、常に彼等の鼻息を窺ひつゝ年々五、六億圓の外貨獲得の重任を果して來たのであるが今次事變の推移に隨つて、蠶絲政策の全面的轉換が要請せられ、蠶絲生産物の新規用途の開拓と國內需要の増進とに依り、轉近に於ける纖維資源の不足を補ふ一方、桑園の一部を食糧政策のために犠牲にせねばならぬことゝなつたのである。

されば最近に於ける蠶絲業の情勢から世上或は本邦蠶絲業の前途を憂慮し、専ら滅亡に瀕するものゝ如く悲觀視する者もないではない

が、抑も、本邦蠶絲業の副産物の性格から考察するも、亦纖維不足の應急對策上からしても將た農村振興と國防強兵の立場から觀ても凡そ養蠶業位農家の現金収入を多からしめるものは見出し得ないのである。然れども現今は主として物資増産を要する時代であるから反當の收穫を金額を以て比較するは當らないかも知れぬ。然らばいま桑園一反歩からの纖維資源の生産量を概算して見るに、先づ絹織維凡そ三貫匁の外、桑條より皮部凡そ三十貫(之より桑紙、桑絲、脂肪綿等約五貫匁餘が得られる)と木質部百四、五十貫(之から人造絹絲用パルプが五百ポンド餘が取れる)尙更に桑園一反歩からの蠶沙で飼養した細羊から羊毛一貫五百匁を獲たとしたら、單位面積からの纖維資源の生産に關する限り、到底蠶絲業の右に出づるものは見當らないのである。

從て蠶絲業は副産物利用の範圍を擴めれば反當りの生産價額から見ても、生産物資の數量からしても、或は勞力の分配より觀るも、我國農業の如き小規模經營に對する副業として最も理想的なる生産業たるは誰しも認むる所である。

只今後事變が長期に亘るに從て、愈々食糧増産の必要度を増す場合は更に桑園減反の要もあるべく、かゝる場合は與へられた單位面積の桑園から極力養蠶能率を増進せしめる如く、凡有る科學技術の粹を盡さねばならぬことは申す迄もない。

向之に加へて蠶蛹、蠶沙等の新規用途の實際化に應じて今後に於ける蠶絲業の資源増産的價値は愈々加はり、時局遂行上蠶絲業の任務は直接又間接に重要な役割を演ずべきは首肯せらるゝ所である。

然れども、今後に於ける蠶絲業の運命を支配すべき重大要綱は(一)蠶絲類の内需増進に伴ふ生産費の低減と(二)蠶桑副産物の遺利開發による福利の増進である。即ち今後に於ける蠶絲業の進展は只管蠶絲科學の研鑽と之等最高技術の一般普遍化に係るものと言はざるを得ない。

況んや幸にして大東亞の新秩序が建設せられたる曉に於て、母國の食糧は全く安全に確保せられ、廣漠たる大共榮園内に於ける纖維の需要が愈々増大する場合、本邦及び大陸に於る蠶絲業の前途が如何に有望なるべきかは想像に餘りある所である。殊に從前の如く米國一ヶ國を唯一の顧客として彼の景氣と需要の消長に因て投機的に變動した絲價の如きも最近に於ける統制法の精神に基き、農村に於ける生産費を基礎として絲價の安定を圖り、無盡蔵に之を海外に供給することゝならば桑園の復活は勿論、蠶絲類は如何に之を増産するも尙足らざるの狀況を呈す可きは明らかなる所である。

竊くば官民偕に本邦蠶絲業の特異的重要性を十二分に認識し愈々隱忍自重し益々統後の守りを堅うして大東亞新秩序の完遂に邁進すべきである。

御挨拶

拜啓 時下益御清祥の段奉賀上候
陳者小生杭州在勤中は一方ならざる御懇情を蒙り奉深謝候
今般社命により無錫支店長を被命候に就ては今後さも不相變御指導を御鞭撻を賜り度奉懇願候
先は以紙上御挨拶申上度如斯御座候
敬具
昭和十六年十二月

華中蠶絲株式會社無錫支店

久保田昌人
住所 中支無錫

謹賀新年

元旦

奉天市大和區加茂町

第二號三井ビル内

滿洲龍麻蠶絲株式會社

依田信一
菅原勇治
西田正

御挨拶

小生には喪中の正月に候へ共決戦下榮光に映ゆる皆様の新正の彌榮を祈上奉候
昭和十六年十二月

三重縣津市藤方

中曾根長男

第廿九回

卒業證書授與式

戰時體制下國策に即應する爲、實業關係學
校の學生、生徒は三箇月繰上げ卒業となり、
母校に於て之に基いて十二月二十六日午前
十時より母校講堂に於て第二十九回卒業證書
授與式が來賓並に父兄多數の臨席を得て舉行
された。

式は宮城遙拜、英靈に感謝、皇軍武運長久
祈願黙禱に始まり、各科卒業生、修業生氏名を
呼名し各科總代(養蠶科大久保孝一君、製絲
科鈴木敏夫君、絹紡織科小川弘之君)に夫々
校長より卒業證書を授與、更に實業教育振興
中央會(會長文部大臣橋田邦彦)表彰状を全卒
業生中最優秀者島田清君(蠶卒)に又本會より
の針線賞を各科優等生中島英男(蠶卒)岩佐隆
次(絲卒)小川弘之(紡卒)の三君に授與された
後、校長式辭として有益な饒りの辭があり、
次いで文部大臣祝辭、來賓より淺井上田市長
實業家代表笠原善吉氏、中等學校代表甲田上
田中學校長、千曲會代表永田平氏等の祝辭が
あり、引續き祝電祝辭披露、在校生總代小泉
正衛君(紡一)の送辭に對して卒業生總代鈴木
敏夫君の答辭があり、最後に校歌を合唱して
此の意義ある式典を閉じた。

井上校長式辭

本日茲に我校第二十九回卒業證書授與式ヲ舉
行スルニ當リ文部大臣閣下ヨリ祝辭ヲ賜ハ
且ツ朝野貴賓各位ノ實臨ヲ辱ウシタルハ洵ニ
本校ノ光榮トスル所ニシテ感謝ニ耐エザル所
ナリ
本日卒業並ニ修業證書授與ノ光榮ヲ擔ヘルモ

- 養蠶科 二九名
- 製絲科 三一名
- 絹紡織科 三一名

選計 九六名

デアアツ諸子ハ入學以來能ク校規ヲ守リ校訓
ニ遵ヒ精勵努力シタル結果今日ノ榮冠ヲ得ル
ニ到レルモノニシテ我等職員一同洵ニ欣幸ト
スル所ナリ
父兄各位ニ於カレテハ多年丹精ヲ盡シテ望セ
ラレタ子弟ノ今日ノ成業ヲ如何バカリ御喜ビ
又御安心ノコトカト御察シ致シ衷心ヨリ御祝
ヲ申上ゲル次第ナリ
諸子ハ本日學窓ヲ出テ實社會ヘノ首途ニ當リ
テ入學以來今日ニ到ル迄ノ蠶雪ノ勞苦ヲ回
想シ今日ノ榮冠ヲ深ク喜ビトセラル、ナラン
併シナガラ諸子ハ自ら反省シ諸子ノ今日アル
ハ備ヘニ聖代ノ惠澤ノ致ス所ナルニ想到シ聖
恩ノ廣大無邊ナルニ感激シ報國ノ念ヲ一層深
クシ國事ニ挺身シ同胞ノ儀表ヲラントスル覺
悟ヲ固クスベキナリ諸子生レテ二十年諸子ノ
今日ヲ成スニ到ル迄諸子ヲ育レテ諸子ヲ安
ンジテ學窓ニ學バシメタル爲メニ拂ハレタ父母
ノ日夜ノ心勞ヲ省ミテ其ノ容易ナラザル鴻恩
ニ對シ報恩感謝ノ念ヲ固メ十分ニ孝養ヲ盡サ
ザルベカラズ。古人ノ所謂「身ヲ立テ道ヲ行
ヒ名ヲ後世ニ揚ゲ以テ父母ヲ顯ハス」ト言フ
孝ノ終リヲ完ウスルコトガ諸子ノ將來ノ務デ
ナケレバナラヌ。
更ニ過去ノ學窓生活ニ於ケル鴻大ナル師ノ恩
友人ノ誘掖、先輩ノ指導等數ヘ盡シ難キ幾多
ノ恩惠ニ想ヒ到ラバ實ニ盡シ切レヌ感謝ヲ捧
ゲナケレバナラヌ感情ノ切ナルモノアラン。
實ニ諸子ノ今日ノ光榮ハ諸子自ラノ辛苦ノ精
晶ニ止マラズ國恩ヲ始メトシテ此ノ如キ幾多
ノ恩澤ノ致ス所ナルコトヲ先ヅ以テ反省シ
謙虛自戒シテ真心ヲ以テ今後ニ盡スルノ心構
ヘテ致サザルベカラズ。此ノ感恩、崇敬ノ誠
正シテ言行ハ大義ノ爲メニハ身命ヲ賭スル所
ニシテテコト行ヒ大義ノ爲メニハ身命ヲ賭スル
尊キ精神ヲ發揮スルニ至ルノテアツテ是ハ又
實ニ我ガ國民道德ノ大本タル忠タリ孝タルナ
我國ト共ニ永遠ナル我が忠孝ノ道ニ就イテ諸

子實社會ヘノ首途ニ當リテ更ニ心構ヘテ新ニ
スルコトヲ切望シテ止マズ。
今や我國内外ノ形勢ハ愈々緊迫シテ國歩益々
困難ヲ加ヘントス。日支事變ハ勃發以來已ニ
第五年ヲ迎ヘ陸下ノ御稜威ト陸海軍將士ノ奮
戰力圖ニヨリ多大ノ戰果ヲ收メタルガ戰禍尙
ホ止マズ時ニ稍熾戰場ヲ蔽ヒ劍光月ニ煌クコ
トアリ。更ニ十二月八日ハ我國包圍陣ヲ形
成シテ經濟的壓迫ヲ加ヘ我興亞ノ大業ヲ遂行
ニ隨害加ヘツ、アリシ米英ニ對シ宣戰布告ノ
詔書 畏クモ煥發セラレ我國ハ自存自衛ヲ全
クスル爲メニ敵國ヲ擊滅スベク斷乎トシテ起
チ上リ開戦以來我が陸海軍將士ノ決死的進軍
ニヨリ世界ヲ震撼スベキ大勝利ヲ博スルコトヲ
得タルハ實ニ欣快ニ堪エザル所ナルガ世界ノ
最大海軍及當ヲ以テ於テ敵國ヲ相手トスルニ
於テ戰ハ長期ニ亘ルモノト思ハザルヲ得ズ是
レヲ以テ我國ハ舉國一致シテ一層固ク銃後ヲ
護リ萬難ヲ排シテ聖戰ノ目的貫徹ノ爲メニ奮
勵努力シツ、アルナリ。
此ノ時ニ當リテ諸子ハ學業ヲ卒ヘテ活社會ニ
出デントス。諸子ハ深ク此ノ情勢ヲ認識シ優
渾ナル舉措ヲ奉獻シ國家ノ鴻恩ト我が陸海軍
ノ將士ノ決死的ノ奮闘ニ對シ深キ感謝ヲ捧ゲ
國家ノ非常時局ニ於ケル卒業生トシテ特ニ奉
公ノ誠ヲ致シ國策ニ沿ヒ各其ノ業務ニ奮勵努
力セザルベカラズ。諸子ノ多クハ直ニ社會ノ
實務ニ就クニアルモノニハ召サレテ兵役ニ服
シ或ハ征戰ニ從フノ光榮ヲ擔フモノモ少クナ
シトセス。
諸子ハ何時ニテモ筆ヲ投ジ劍ヲ執ツテ勇躍國
難ニ赴クノ覺悟ヲ固メテ居ルト信ス。一旦緩
急アルノ時職ヲ担ヒ地位ヲ棄テ身命ヲ君國ニ
捧グルハ是レ正ニ皇國男子ノ本懐ナリ。諸子
ニシテ軍ニ從フモ或ハ日常ノ職務ニ就クモ常
ニ此ノ覺悟ト此ノ決意トヲ持シテ眞ニ不撓不
屈ノ努力ヲ致サザルベカラズ。
現下ノ緊迫セル時局ニ對處スル爲メニハ國家
ハ人的資源ノ最高度活用ヲ要望スルヲ以テ是
レニ應スル爲メニ本年ヨリ修業期間ガ短縮セ
ラレ諸子ハ本日ヲ以テ卒業スルコトニナリタ

ル次第ナリ。諸子ハ此ノ奮義ヲ深ク心ニ刻ミ
大ナル決心ヲ以テ國家ノ要望ニ添ヒ進んで此
ノ難局ニ當リ是レヲ克服スルノ覺悟ヲ持チ宜
シク正道ニ立脚シ思想ヲ堅實ニシ禮節ヲ重シ
シ謙讓ノ徳ヲ守リ以テ人格ノ向上ニ努力セザ
ルベカラズ。
將來指導ノ位置ニ立ツベキ諸子ニ於テハ高潔
ナル人格ハ最も必要ナル所ニシテ諸子ハ本校
ニ於テ修得シタル學術ハ國家經濟上最も重要
ナルモノナリ。諸子ハ在學中修得シタル智識
ヲ基礎トシテ益々研鑽ヲ重ね創作性ノ發揮ニ
致メ、特ニ現下ノ如キ蠶絲業ノ轉換期ニ際シ
更ニ羊毛其ノ他ノ窮乏纖維ニ代ハリテ實用織
維トシテ絹絲ガ立ツベキ時ニ當リテハ諸子ハ
一層奮勵努力シ蠶絲業ノ各方面ニ涉リテ研究
改善ヲ計リ國富ノ開發ニ資セザルベカラズ。
之レ實ニ國家ガ諸子ヲ養成シタル鴻恩ニ酬
ル所以ナリ。
諸子ハ各々其ノ長所、短所アリ、諸子ハ自
ラ其ノ長所短所ヲ能ク省察シテ其ノ長ヲ伸バ
シ其ノ短ヲ矯メルコトニ努メ他人ノ忠告ヲ能
ク聞キ何事ヲ爲スニモ功ヲ急ギ或ハ焦慮スル
如キコトアルベカラズ。諸子ハ能ク下積ミノ
勞苦ニモ甘ンジ身ヲ挺シテ難局ニ當リ隱忍自
重以テ其ノ職分ニ勵ミ切瑣瑣、勉メテ他マ
ズ以テ實力ヲ蓄ヘルコトガ將來ノ大ヲナス所
以ナルヲ能ク銘記スベキナリ。
諸子ハ能ク此ノ心掛ヲ以テ自奮自勵氣宇ヲ闊
大ニシテ職見ヲ高尚ニシ愈々徳ニ進ミ業ヲ修
メ品性器能ノ玉成ニ力ヲ効スベキナリ。
我々ハ西ニハ北アルプス連山白雪皚々トシテ
聳ユ諸子ニ高潔不動ノ精神ヲ教ヘ居リ、東ニ
ハ千曲ノ清流滔々トシテ千古休々トシテ諸子
斷ノ活動ノ精神ヲ示シ居リ。今や諸子ト別
離ニ當リ諸子ハ能ク懷シキ母校ヲ諸子ト別
然ノ教訓ヲ終生志レズ母校ノ精神發揚ニ努力
セラレンコトヲ望ミテ止マズ。
茲ニ諸子ガ社會ヘノ發程ニ當リ前途ヲ祝福シ
テ成功ヲ祈ル。
昭和十六年十二月二十六日
上田蠶絲專門學校校長從三位勳三等井上柳椿

遠藤先生退官記念品
贈呈資金受領報告
(三月五日現在)

清水 衛敏 中川 博司 岡 卓郎 吉澤 武夫 倉澤 恒夫 芝野 三郎 酒井 米吉 尾藤 省三 小林 繁 平澤 勝 好土 泰造 原 清志 小野 修二 都丸 晴治 林 貞三 角田 收 中島 文雄 中村 壽命 岸 勝彌 橋本 博 竹本 炳禮 門平潤一郎 和島 恭一 飯島 正胤 小宮山太助 河田 泰 石井 清六 關田 九平 關田 九平 中澤 二郎 三輪 貞徳 鈴木 玄九 松下 嘉博 米田 俊雄 枇杷木 潤雄 清水 英人 田中 康雄 太田 慎一郎 村田 一由	今村 良郷 唐木田藤五郎 久保田昌人 窪田 禎作 三橋 宜夫 高木 三治 宮川 繁治 栗原 章 中島静太郎 川船 卓彌 齋藤 舍 市川 信一 坂口 孝保 野里 秀直 中村治三郎 佐藤 國一 松村 秀美 母袋 良平 齋藤 格次 竹内 虎夫 中島角太郎 宮堀 俊雄 仲内 静 宮崎 弘 眞木 元 早乙女徳藏 會田 誠司 久保田不二夫 關 熙 安川 寛 萩原 清治 西田 正 北島 正生 三瓶常四郎 飯島 安治
--	--

藤本 衛佐雄 井澤 喜三 久保田正樹 三原 孫藏 針塚 一 西原 淳一 山田 良人 大熊 康代 内藤 良雄 市原 政治 清水 秀俊 濱村 一彦 谷澤 衛 藤澤 夕 市瀬 武壽 宮崎 秋雄 木内 茂雄 内藤 康三 鷹野 貞雄 北澤 延榮 酒匂 登雄 工藤 見吉 富部 豊 長澤 得榮 丸川 貞次 瀧澤 七郎 山本友之政 掛川 しづ 福澤 とも 右合計金貳百參拾貳圓也 累計金五百六拾五圓也 以下(二月五日現在)	島田 博 緒村 直高 會山 小六 中山 吉二 森本爲之助 橋詰美智子 羽藤 泉 細川 俊雄 水野 義男 中村 繁 井口 澄夫 竹内 直志 笠井 里志 尾崎 利雄 北原 幸治 川中 貞次 櫻井 弘吉 今井 又藏 宮入 保 新野元治郎 太田 光 吉田 隆雄 宮澤 久雄 遠山 正人 佐本 保雄 小林すざ枝 甲田 節 高須 兵司 橋本 武光 倉澤 美徳 上原 清夫 星野 莊次 濱村 長久 遠藤 正壽
---	--

1 金貳圓也 宮尾三右衛門	2 金貳圓也 山越 茂 高木 三治 牧野 春雄 栗原 章 中島静太郎 關 嘉四郎 井澤 喜三 相村 貞 栗林 悦 宮坂 三郎 都丸 晴治 中島 茂 田ノ岡 實	3 金貳圓也 小宮山太助	2 金貳圓也 宮原 秀人 飯島 正胤 尾藤 省三 關田 九平 好士 泰造 川船 卓彌 松村 季美 母袋 良平 三浦 重雄 安川 寛 北島 正生 鷹野 眞雄 竹内 虎夫 篠澤 夕	1 金貳圓也 西田 正 的場 小六 沖 濤治 中村治三郎 吉澤 武夫 村田 一由 清水 衛敏 岡部 彌平 中川 博司	2 金貳圓也 小口 鹿男 小口 宗久	1 金貳圓也 萩原 正次 竹本 炳禮	2 金貳圓也 久保田不二夫 柳澤 安枝 宮川三郎 櫻井 弘吉 赤沼まき子 掛川 しづ 小林すざ枝 福澤 とも 甲田 節	3 金拾圓也 頭書ニ1、トアルハ第一回醸出者 3、トアルハ第三回醸出者 (十二月五日現在)	2 金壹圓也 向井 政彌 岩根 謙 佐藤 克治 小田 勳 新井 清平 川谷壽一郎 北村 義近 水口 米雄 田澤 頼雄	伊藤 幸男 山崎 壽 樋村 忠義 田浦 準 濱田 秀彌 入佐 一郎 町田 史郎 山岸 恒一
------------------	--	-----------------	--	---	--------------------------	--------------------------	--	--	---	--

1 金壹圓也 笠井 里志 磯部 鐵雄 工藤 見吉 小野 修二 中島角太郎 西原 淳一 細川 俊雄 井口 澄夫 藤本衛佐雄 尾崎 利雄 竹内 直人 尾崎 利雄 批杷木 潤雄 水野 義男 吉田 隆雄 梶田 廣貞 吉田 廣貞 羽藤 泉 中村 誠 堀内 茂雄 木内 茂雄 久保田不二夫 柳澤 安枝 宮川三郎 櫻井 弘吉 赤沼まき子 掛川 しづ 小林すざ枝 福澤 とも 甲田 節	2 金壹圓也 山崎 壽 佐藤 國一 大田 光 峰村 壽命 永井 俊郎 内藤 良雄 宮川 繁治 川上 連 曾山 直高 市瀬 武壽 仲藤 潮 千葉 遠人 山崎 かよ	1 金七圓八拾參錢也 飯森としと 1 小宮山 順 1 土屋 道子 1 金子 葉子 1 柴田 繁子 1 宮崎美恵子 1 柳澤たけじ 2 山寺 孝 1 佐藤 澄子 1 宮崎 久恵 1 小山 和子 1 赤阿 綾子 1 柳澤たけじ	1 金五圓也 飯島 安治 倉澤 美徳 飯島 眞雄	1 金參圓也 渡邊 亘	2 金參圓也 橋本 武光	2 金五圓也 永田 輝雄	2 金五圓也 田浦 平	2 金五圓也 飯島 眞雄	2 金五圓也 飯島 眞雄
--	---	--	-----------------------------------	----------------	-----------------	-----------------	----------------	-----------------	-----------------

會費領收

(五月五日現在)

2金貳圓也	伊藤 幸男	湯澤 重敬
1金貳圓也	上原 清夫	山崎 壽
	高須 兵司	鶴田 定平
	山井 千幸	遠藤 正壽
	鈴木 正悟	土生 珀二
	佐藤 克治	
1金壹圓貳拾錢也	高橋よし江	
2金壹圓也	塚田 康男	
1金壹圓也	入佐 一郎	秋馬 彌平
	佐藤 崇	
右合計金六拾五圓參拾錢也		
累計金壹千五百貳拾參圓五拾參錢也		

金拾貳圓也	長谷川政雄(貳元)	關三四郎(絲元)
金拾圓也	高橋重一郎(絲元)	松野 輝彦(絲元)
金五圓也	北原 至(貳元)	伊藤 一義(絲元)
	北原 有川	清水 英俊(絲元)
	今井 省吾(貳元)	片山 巖(絲元)
	池田 逸郎(貳元)	阿部 信夫(絲元)
	大坪 健一(絲元)	高橋 公一(絲元)
	小宮 貞三(絲元)	中島 醇(絲元)
	土屋 三男(絲元)	岩佐 隆次(絲元)
	井上 正人(絲元)	柳澤 六平(絲元)
	佐多 直道(絲元)	東 正雄(絲元)
	細井 政吉(絲元)	小川 弘之(絲元)
	下世古廣志(絲元)	小川 利治(絲元)
	林 正信(絲元)	
	武井仙太郎(貳元)	
未納會費納入者	石井 清六(絲元)	
金貳拾圓也	石井 清六(絲元)	
金四圓也	入佐 一郎(貳元)	
	高橋重一郎(絲元)	
	伊藤 一義(絲元)	
昭和十七年度會費金四圓也		
宮坂 三郎(絲元)		
(昭和十七年一月五日現在)		

水口 米雄(貳元)	森西 康充(絲元)
内藤 次郎(絲元)	宮島 靜三(絲元)
牧 道男(絲元)	高橋重一郎(絲元)
中村 進(絲元)	伊藤 一義(絲元)
岡田 廣太(絲元)	田中 信重(絲元)
廣政共(絲元)	佐多 直道(絲元)
東 正雄(絲元)	佐藤 崇(絲元)
伊藤 幸男(絲元)	伊藤 一義(絲元)
阿部 信夫(絲元)	原 秀一(絲元)
東 正雄(絲元)	
終身會費納入者	
濱村 長久(貳元)	武井 和夫(絲元)

叙任辭令

現職員之部	上田蠶絲專門學校教授	野口新太郎
	陸高高等官五等(十一月一日)	倉澤 美徳
	敘勳六等授瑞寶章(十一月十一日)	北村 俊一
	任上田蠶絲專門學校書記(十一月廿九日)	實 藤
	陸高高等官五等(十二月一日)	
卒業生之部	公立實業學校教諭兼舍監	弓田 弘
	兼職ヲ免ス、福島縣立會津農林學校教諭ニ補ス(七月三十一日)	
	公立實業學校長	藤原 卓之
	地方農林技師	坂田 榮雄
高等官三等特選	同	金兒 文夫
高等官四等特選	同	丸山 武夫
高等官五等特選	同	栗原 章
	同	小林 茂雄
	同	稻田 實
	同	桑田 庄七
	同	宮城 博

本校辭令

願ニ依リ副手ヲ免ス(十一月十二日)	副手 佐藤 彌
願ニ依リ副手ヲ免ス(十一月八日)	副手 清水比呂夫
願ニ依リ副手ヲ免ス(十二月二十日)	副手 武井 和夫
願ニ依リ副手ヲ免ス(十二月二十三日)	副手 遠藤 恒久
願ニ依リ副手ヲ免ス(十二月二十日)	副手 山邊 十一

社團法人千曲會 第二回總會

總會 次第

十一月二十三日午前九時より母校内千曲會館に於て社團法人千曲會第二回總會(第十五回代議員會)開催さる。出席會員は針塚顧問井上名譽會長を始め二十支會の五十六名、在會會員二十三名で、國民儀禮を行つた後、蒲生理事長開會の挨拶と共に本會發展に就いて述べ、次いで井上名譽會長の挨拶、倉澤理事の會務報告があつた後、議長選舉が理事長指名となり、高島秀男氏が議長、土屋茂一郎氏が副議長に就き議事に入つた。

會は正午に於て一時休會として一同晝食、記念撮影、母校關係殉國英靈供養塔前に禮拜休憩して二時半に再會、四時には議事を終了して以後提案外の懇談的協議會をなし五時閉會、次いで香青軒に於ける懇親會に移つた。

開會の辭(理事長)

臨戰體制下多忙の折にも拘らず各位には遠路御出席されて有難う御座います。

尙本會々員は二〇〇五名にして、内課養蠶科八〇七名、製絲科七六二名、絹紡織科二八二名、準會員一五四名であります。

然し佛故されたもの昨年度一五名にして深く弔意を表する次第でありまして又今回の事變に召された数は二〇〇名を突破し、此の中一九名を失つて居りまして何れ後刻英靈供養塔前にぬかがづいて祈りたいと思ひます。

前回以後母校の發展模様に就いては會報により大體御承知の管でありまして、本會に關聯するもの一、二を擧げて見ますと

一、母校では新設纖維化學科の爲め新しき先生又三月末日退官された遠藤先生の後任の先生を迎えましたので之等の先生を後刻贊助會員に推薦して頂きたい。

二、昨年十一月より報國團報國隊が結成され學生教職員一休となつて活動して居り、林

昭和十五年年度社團法人千曲會收支決算書

收 入		支 出	
一金六千六拾八圓也	入	支 出	出
一金六千百參拾六圓四拾四錢	入	支 出	出
一金六千六拾八圓也	入	支 出	出
一金五千百五拾七圓七拾九錢	入	支 出	出
收支差引金九百七拾八圓八拾五錢	入	支 出	出
右總會ノ認定ニ附ス	入	支 出	出
昭和十六年十一月二十三日	入	支 出	出

社團法人千曲會理事長 蒲 生 俊 興

收 入				支 出				
科 目	項 目	決 算 額	種 目	決 算 額	種 目	決 算 額	種 目	
一會 費	一 通常會費	三、七五、四〇〇	一 預 金 利 子	一、一〇〇、〇〇〇	一 現 金 預 金 利 子	一、一〇〇、〇〇〇	一 蓄 積 金	一〇〇、〇〇〇
	二 準會員會費	三、六五、八〇〇		二、七五、〇〇〇		二、七五、〇〇〇		二、七五、〇〇〇
二 收 入	一 基本財産 入	一、〇〇〇、〇〇〇	二 雜 收	一、〇〇〇、〇〇〇	二 雜 收	一、〇〇〇、〇〇〇	二 雜 收	一、〇〇〇、〇〇〇
	二 雜 收	九七、七〇〇		九七、七〇〇		九七、七〇〇		九七、七〇〇
三 雜 收 入	一 印 告 入	七三、七〇〇	三 雜 收	七三、七〇〇	三 雜 收	七三、七〇〇	三 雜 收	七三、七〇〇
	二 廣 告 入	七三、七〇〇		七三、七〇〇		七三、七〇〇		七三、七〇〇
四 寄 附 金	一 附 金	一〇〇、〇〇〇	四 寄 附 金	一〇〇、〇〇〇	四 寄 附 金	一〇〇、〇〇〇	四 寄 附 金	一〇〇、〇〇〇
	二 附 金	一〇〇、〇〇〇		一〇〇、〇〇〇		一〇〇、〇〇〇		一〇〇、〇〇〇
五 歳 入 合 計		六、一三六、六〇〇	五 歳 入 合 計		六、一三六、六〇〇	六、一三六、六〇〇	六、一三六、六〇〇	
入				出				
決算額				決算額				
種目				種目				
本年				本年				
度				度				
増				減				
附				附				
記				記				

豫算ニ對シ金四十七圓九十四錢増シタルハ當座預金多カリシニヨル
豫算ニ對シ金三十四圓七十錢増シタルハ會報ノ賣上多カリシニヨル

も止むを得ず又校外實習も減少する事と思ひ
まゝが御承の上卒業後に於て各位の御指導
を願ふ次第であります。

尚従来、繊維綜合講演會が各地に順目的に
行はれて居りまして、現今蠶絲の羊毛化が計
られて居る折柄、來年度は蠶絲會が之を引受
けることとなり、會長とも相談の上で當地上
田で開催したらと言はれ、本校でも大いに講
意を表した次第であります。之が開催の曉に
も各位の御骨折を願ひたいと思ひます。

會務報告(倉澤理事)

前同總會に於て決議になり理事者に委任さ
れました案並に其他に就いて御報告申し上げま
す。

(一)、本會入會金を在学中に積立せしむる件
この件に就て學校當局と協議しようと思つ
て居ました處、同校友會が報國團に改組され
内容が擴大されたにも拘らず時節柄團費を増
さぬと言ふことになりまして、此際、本
案を出すは當を得ないと思ひ、控へまして明
年團費を増額すると云ふ様な場合にも再協
議したい。

(二)、會費の一時金納入方法改正に關する件
之に就いては理事者に其の研究を任かれま
したので、研究の結果案を得ましたが、結局
定款變更になりますので、後刻定款中改正に
關する件の協議の際御審議願ひたい。

(三)、統後會費募集に關する件
之に就いては先般第二回募集狀を各會員に
出しました事は各位の御承知の通りでありま
して、着々融金を願つて居ります。將來も努
力致しますが、各支會に於ても一層の御助力
を願ひたい。

(四)、社団法人設立功勞者表彰の件
この功勞者久保藤一氏は固く之を辭退され
て居りますので最近に於て何かに更えて其の
表彰をする積りで居る。

(五)、其の他の件に就いては大體會報にて御
報告してありますので省略させて頂きたい。

第二回千曲會總會出席者氏名

- | | | | |
|------|---|--------|--------|
| 顧問 | 針塚長太郎 | 龍川支會 | 龍川支會 |
| 名譽會長 | 井上 俊樹 | 諏訪支會 | 諏訪支會 |
| 理事 | 浦生 俊興 | 安支支會 | 安支支會 |
| 監事 | 松村季美、中澤忠、倉澤美徳、
久保田正樹、須田三三、林貞三、細川三郎
永田平、小宮山太助、野口新太郎、小松忠
一郎、山口定次郎、窪田潤 | 北信支會 | 北信支會 |
| 監事 | 高木三治、森本爲之助、笠原正巳
芝荒雄、岸勝彌、岡部彌平、森田
三郎、石坂虎次郎、味澤泰造、猪坂直一、
金崎眞英、勝又藤夫、小林良亘、和田晋 | 北陸支會 | 北陸支會 |
| 代議員 | | 越佐支會 | 越佐支會 |
| | | 岐阜支會 | 岐阜支會 |
| | | 三重支會 | 三重支會 |
| | | 東海支會 | 東海支會 |
| | | 静岡支會 | 静岡支會 |
| | | 神奈川支會 | 神奈川支會 |
| | | 東京支會 | 東京支會 |
| | | 埼玉支會 | 埼玉支會 |
| | | 群馬支會 | 群馬支會 |
| | | 茨城支會 | 茨城支會 |
| | | 栃木支會 | 栃木支會 |
| | | 福島支會 | 福島支會 |
| | | 宮城支會 | 宮城支會 |
| | | 福山支會 | 福山支會 |
| | | 船後 勇平 | 船後 勇平 |
| | | 兒玉 信彦 | 兒玉 信彦 |
| | | 丸山 武夫 | 丸山 武夫 |
| | | 網村 貢 | 網村 貢 |
| | | 岩本 賢平 | 岩本 賢平 |
| | | 母袋 重雄 | 母袋 重雄 |
| | | 三浦 兵衛 | 三浦 兵衛 |
| | | 野本 治兵衛 | 野本 治兵衛 |
| | | 橋本 景吉 | 橋本 景吉 |
| | | 高島 秀男 | 高島 秀男 |
| | | 小林 進美 | 小林 進美 |
| | | 森田 三郎 | 森田 三郎 |
| | | 岩田 三郎 | 岩田 三郎 |
| | | 岩本 賢平 | 岩本 賢平 |
| | | 小川 康保 | 小川 康保 |
| | | 土屋 茂一 | 土屋 茂一 |
| | | 平澤 勝 | 平澤 勝 |
| | | 小見 益男 | 小見 益男 |
| | | 白澤 佐一 | 白澤 佐一 |
| | | 稻石 佐一 | 稻石 佐一 |
| | | 森田 三郎 | 森田 三郎 |
| | | 市村 志真衛 | 市村 志真衛 |
| | | 湯原 實 | 湯原 實 |
| | | 北澤 喜三 | 北澤 喜三 |
| | | 井澤 正三 | 井澤 正三 |
| | | 赤羽 二 | 赤羽 二 |
| | | 新野 元治郎 | 新野 元治郎 |
| | | 藤本 齊 | 藤本 齊 |
| | | 町田 博 | 町田 博 |
| | | 諸岡 政共 | 諸岡 政共 |
| | | 瀧澤 政共 | 瀧澤 政共 |
| | | 信重 | 信重 |

昭和十七年度社団法人千曲會收支豫算書

昭和三十七年十一月二十三日
社団法人千曲會理事長 浦生 俊興

支		收	
科目	項目	科目	項目
一 會議費	一 總會費	一 生ズル	一 基本財産
		二 繰越金	二 前年繰入金
		三 雑収入	三 雑収入
		四 入會金	四 入會金
		五 會費	五 會費
		六 寄附金	六 寄附金
		七 雑収入	七 雑収入
		八 預金利息	八 預金利息
		九 雑収入	九 雑収入
		一〇 雑収入	一〇 雑収入
		一一 雑収入	一一 雑収入
		一二 雑収入	一二 雑収入
		一三 雑収入	一三 雑収入
		一四 雑収入	一四 雑収入
		一五 雑収入	一五 雑収入
		一六 雑収入	一六 雑収入
		一七 雑収入	一七 雑収入
		一八 雑収入	一八 雑収入
		一九 雑収入	一九 雑収入
		二〇 雑収入	二〇 雑収入
		二一 雑収入	二一 雑収入
		二二 雑収入	二二 雑収入
		二三 雑収入	二三 雑収入
		二四 雑収入	二四 雑収入
		二五 雑収入	二五 雑収入
		二六 雑収入	二六 雑収入
		二七 雑収入	二七 雑収入
		二八 雑収入	二八 雑収入
		二九 雑収入	二九 雑収入
		三〇 雑収入	三〇 雑収入
		三一 雑収入	三一 雑収入
		三二 雑収入	三二 雑収入
		三三 雑収入	三三 雑収入
		三四 雑収入	三四 雑収入
		三五 雑収入	三五 雑収入
		三六 雑収入	三六 雑収入
		三七 雑収入	三七 雑収入
		三八 雑収入	三八 雑収入
		三九 雑収入	三九 雑収入
		四〇 雑収入	四〇 雑収入
		四一 雑収入	四一 雑収入
		四二 雑収入	四二 雑収入
		四三 雑収入	四三 雑収入
		四四 雑収入	四四 雑収入
		四五 雑収入	四五 雑収入
		四六 雑収入	四六 雑収入
		四七 雑収入	四七 雑収入
		四八 雑収入	四八 雑収入
		四九 雑収入	四九 雑収入
		五〇 雑収入	五〇 雑収入
		五一 雑収入	五一 雑収入
		五二 雑収入	五二 雑収入
		五三 雑収入	五三 雑収入
		五四 雑収入	五四 雑収入
		五五 雑収入	五五 雑収入
		五六 雑収入	五六 雑収入
		五七 雑収入	五七 雑収入
		五八 雑収入	五八 雑収入
		五九 雑収入	五九 雑収入
		六〇 雑収入	六〇 雑収入
		六一 雑収入	六一 雑収入
		六二 雑収入	六二 雑収入
		六三 雑収入	六三 雑収入
		六四 雑収入	六四 雑収入
		六五 雑収入	六五 雑収入
		六六 雑収入	六六 雑収入
		六七 雑収入	六七 雑収入
		六八 雑収入	六八 雑収入
		六九 雑収入	六九 雑収入
		七〇 雑収入	七〇 雑収入
		七一 雑収入	七一 雑収入
		七二 雑収入	七二 雑収入
		七三 雑収入	七三 雑収入
		七四 雑収入	七四 雑収入
		七五 雑収入	七五 雑収入
		七六 雑収入	七六 雑収入
		七七 雑収入	七七 雑収入
		七八 雑収入	七八 雑収入
		七九 雑収入	七九 雑収入
		八〇 雑収入	八〇 雑収入
		八一 雑収入	八一 雑収入
		八二 雑収入	八二 雑収入
		八三 雑収入	八三 雑収入
		八四 雑収入	八四 雑収入
		八五 雑収入	八五 雑収入
		八六 雑収入	八六 雑収入
		八七 雑収入	八七 雑収入
		八八 雑収入	八八 雑収入
		八九 雑収入	八九 雑収入
		九〇 雑収入	九〇 雑収入
		九一 雑収入	九一 雑収入
		九二 雑収入	九二 雑収入
		九三 雑収入	九三 雑収入
		九四 雑収入	九四 雑収入
		九五 雑収入	九五 雑収入
		九六 雑収入	九六 雑収入
		九七 雑収入	九七 雑収入
		九八 雑収入	九八 雑収入
		九九 雑収入	九九 雑収入
		一〇〇 雑収入	一〇〇 雑収入

支會通信

栃木支會便り

秋深き十一月十六日宇都宮に於て千曲會館本支會を開催、當日天氣晴朗午後一時縣下の同窓各氏十名が一室に會し一年振りの顔は少いが西那須野の芳谷君は初めて他は皆顔なじみの間柄、篠原大先輩が見え青木、糟谷の古顔も參集先づ豫定の旭町の中村屋へ會するも當日折悪く公休日、市内に他に適所なし、糟谷氏の御宅へは御迷惑だが御厄介になる奥様御嬢様の御接待に恐縮し乍ら又格別の暖い水入らずの會合であつた。時局柄各職場に對する色々の話合ひも少くはなかつたが、本部よりの協議題たる校名變更の件に對する支會としての意見が討議されたが仲々重大問題だけに結論に達せず、不肖が代議員會に出席する爲一任された。其の間に糟谷さんの奥様の御手厚き御料理が次々に出され一同舌鼓を打ちつゝ四方山の話に盛んに花を咲かす、時節柄調達困難視された配給迄が卓上に運ばれる一同の顔色見る内に輝を増し一層相互の會談は白熱化する老年組はお嬢さんの齡とか嫁の心配又は令息の出世等人の親の情味を出し乍ら頼母しき落付を見せ、一方若手組は職外の事情等熱の溢れた情景を描出した。何んと云つても時流にお互は大きな緊張の色を見せて居る支會長柳澤忠次氏は目下〇〇に出動されて居るので慰問品及び會員一同の寄せ書を送る事にし武運長久を祈つた。

當日出席された會員は大先輩の篠原氏昭榮の原料課長で多難の役割を切り廻して居られる。御嬢さんも最早年頃の由頗る才媛適當な候補者は無きや。青木さん何時も齡より若く

見える若型併し長女は嫁がれ近い内に御孫さんが出来るとか、長男の人は陸士を此七月卒業され目下〇〇に御活躍とか頼母しき限り、糟谷さん學校方面の大先輩縣内では無くてはならぬ人近いに校長先生に榮轉の山、猪瀬氏先程矢板から眞岡へ榮轉された奉任の先生口も八丁手も八丁短髪童顔校内切つてのやり手將來ある先生である。鹿沼農商の高橋さん貴公子然たる先生御子さんが會員隨一の子福者、御子息三人御嬢さん三人の國策型尙皆揃ひも揃つての優良兒談しき限り。昭榮の矢島君須坂在任當時筆者も同町蠶業學校に在職し居り時折會合親交を厚くしたものだ。今春小山へ榮轉し何時も變らぬ落付いた對度、少尉殿だがお召は未だ將來重役の紫地は充分、宇都宮工業の羽吉君若手の代表所熟あり同校で博物の先生は少し専門外君の如き専門につけば天才の現れや必然御多幸を祈る。西那須野の芳谷君小山町の産新進の士君の取締方面に居る事縣内只一人上田を代表して居るの感あり吾等同君の將來を大いに屬望して居る。

宇都宮市商業の勳使河原君天型的教育者變轉極り無き世界情勢に立處する商業戦士育成に君の人格と識見を以つてせば國家の要望する人士の排出は必然たり。本日小山檢定所新庄氏山保毛織の安井君足利輸出織物檢査所の柳澤信義君及び準會員諸姉が御都合で出席されなかつた事は少し淋しかつた。最後に筆者は栃木農學校に居る兒玉と云ふ男相變らず元氣だけが取り得。互の話は何時盡るも不解らも遠近へ本日中に歸任する各位の都合上午後七時頃糟谷氏宅の御厚意を満腔に喫し乍らお互に確りやらうぜと肩を叩きつゝ別れた。尙寄書に「中村屋に於て」とあるは最初の計畫通りに書いたもの最後に糟谷さんの奥さん御嬢さんに對して會員一同御厚意に深く感謝して纏筆する。

(一一、一七記)

基本財産 (昭和十五年未現在)

一、基本財産	項目	金額	摘要
前年度繰越高	前年度繰越高	四六、九〇七、四八	内金五四七二四八二錢ハ終身會費分
	本年度積立金	一、六五一、一六	
本年度積立金	入會金	一、五二一、〇〇	
内譯	一時金會費	九六六、〇〇	
右ニ對スル本期間利子	右ニ對スル本期間利子	五五五、〇〇	
通常會計ハ拂出	通常會計ハ拂出	二一、五〇	
差引現在額	差引現在額	四八、九〇一、一四	

二、海外留學資金

項目	金額	摘要
前年度繰越高	一、〇三八、三九	印稅收入
本期間收入利子	三六、五五	
本年度積立金	三二、五〇	野口理事ハ支拂
滿支産業調査會ハ補助	六五〇、〇〇	
差引現在額	四五七、四四	

三、研究獎勵資金

項目	金額	摘要
前年度繰越高	三〇四、〇四	
本期間收入利子	一〇、七〇	
本年度積立金	二〇、〇〇	
合計現在額	三三四、七四	

四、針塚賞基金

項目	金額	摘要
前年度繰越高	六、一一二、七八	
本期間收入利子	二五二、〇〇	
合計現在額	六、三六四、七八	
總計現在額	五六、〇五八、一〇	

計報

和田 幸一氏逝去

昭和十一年製絲科卒業、農林省蠶絲局産繭課勤務の和田幸一氏(絲三)が十月 日病死された事が何の通知もなかつた爲、漸く十一月に知つた。謹んで御冥福を祈る次第である。

正木 章三氏逝去

昭和四年製絲科卒業の正木章三氏(絲二)は住年病を得て、長らく七里ヶ濱風園に療養されて居たが其の効空しく十月二十日逝去さる。謹んで弔意を表する次第である。

伊藤 清氏逝去

大正七年製絲科卒業、有限責任長野縣生絲共同販賣施設組合に勤務中の伊藤清氏(絲五)は病を得て郷里茨城縣北相馬郡布川町に療養されしも其の効空しく十一月三十日遂に逝去さる。謹んで弔意を表する次第である。

弔慰金募集

故園田 信男氏 十八圓
故秋山 和夫氏 十七圓
故外城 幸一氏 十六圓
故伊藤 清氏 十五圓
故正木 章三氏 十四圓
故和木 幸一氏 十三圓
故山田 幸一氏 十二圓
故藤田 幸一氏 十一圓
故六氏 對し弔意金を募集致します。
故園田氏、故外城氏、故秋山氏は昭和十七年二月末日、故和木氏、故正木氏は昭和十七年三月末日迄に取經め御遺族に贈呈致したいと思ひますから夫れに間に合ふ様振替口座東京四三三四一各へ故人に對する弔慰金の旨御記入の上御拂込下さい。
昭和十六年十二月 千 曲 會

弔慰金報告

(十二月五日)
現 在
故柏倉豊吉氏弔慰金 中曾根長男
金貳圓也

右合計金貳圓也
累計金五拾八圓也
故吉川誠彦氏弔慰金 刈田 恭一
金貳圓也

右合計金參圓也
累計金八拾參圓也
故足立光男氏弔慰金 宮澤 久雄
金五圓也

右合計金七圓也
累計金參拾八圓也
故加藤好男氏弔慰金 平澤 勝
金拾圓也

金五圓也
吉澤 武夫
香山 清和
林 貞三
岩田久太夫
沖 清治
菊田 恭一
齋藤 格次
三好 彌市
橋本 博
茨木 こう
富川 繁治

金壹圓也
右合計金九拾四圓也
累計金參百七拾圓也
故西川正夫氏弔慰金 谷澤 衛
橋本正太郎
中村 繁

金壹圓也
右合計金拾圓也
累計金拾九圓也
故園田信男氏弔慰金 香山 清和
右合計金貳圓也
累計金四圓也
故外城和氏弔慰金 磯部 鐵雄
右合計金貳圓也
累計金貳圓也

故秋山幸男氏弔慰金 河田 泰
金貳圓也
右合計金貳圓也
累計金貳圓也
故和木幸一氏弔慰金 宮坂 三郎
金貳圓也

右合計金四圓也
累計金四圓也
以下(一月五日現在)
故吉川誠彦氏弔慰金 鶴田 定平
金貳圓也

右合計金拾五圓也
累計金八拾五圓也
故加藤好男氏弔慰金 芝 荒雄
金五圓也

金參圓也
鶴田 定平
倉澤 美徳
須田 圭二
田浦 準
山崎 潤
山口定次郎

右合計金貳拾五圓也
累計金參百九拾五圓也
故園田信男氏弔慰金 宮坂 科晃
金五圓也

右合計金七圓也
累計金拾壹圓也
故外城和氏弔慰金 高橋重一郎
金五圓也

右合計金七圓也
累計金九圓也
故秋山幸男氏弔慰金 今井 省吾
金貳圓也

右合計金五圓也
累計金七圓也
故正木章三氏 妻 神奈川縣平塚市馬入二四六八
正木 史子

死亡會員遺族よりの禮狀

昭和十六年十二月十五日
神奈川縣平塚市馬入二四六八
正木 史子

有志弔慰金に對する遺族よりの禮狀

奈良縣宇陀郡内牧村大字八瀨
故吉川誠彦氏 長男 吉川 孜
愛知縣海部郡津島町南門前町
故鈴木 進氏 父 鈴木仙三郎
山形縣東村山郡豊田村岡一番地
故柏倉豊吉氏 長男 柏倉 博

南安曇郡穂高町
故中島俊秋氏 父 中島 龜一
福島市太田町八
故渡邊雪雄氏 妻 渡邊喜美代

上田市新參町
故足立光男氏 父 足立 正吉
上田市袋町
故佐藤 晃氏 長男 佐藤 洋晃

正木章三君の想ひ出

山井 千 幸
正木君と上田に於て學生生活を通じての
は、上田城趾の公園が擴められ、市のグラ
ンDが設置され、學校では樂園の跡へ絹絲化學
教室が造られた頃であるから凡そ十五年前に
なるであらう。信州飯田の生れ飯田中學から
製絲科へ入られた、卒業後は横濱生絲検査所
に就職し、其の後不幸病を得て病臥すること
四年餘り、三十四歳を一期として晩秋の日靜
かに此の世を捨て去つた。
○風光るま空の秋の赤とんぼ切れ切れに人の
想ひ出さるゝ、

學生當時の正木君の作であるが追惜の情に
堪えないものがある。正木君は品のよい体恰
好をして居て勝れた直感力と觀察力を包蔵し
て折に觸れ片鱗を閃めかして居たのであるが
短歌は固より、良い文章を草し、獨特な繪を
畫き、唇を開いては一角の論客であつた。東
寮に三年間終始し、軽く杖を持ち乍らよく附
近を散策しつゝ、自然に對して觀察し豊富なる
情趣を養つて居た、學校ではつづつと文藝部の
委員として乏しい校友會豫算でやり繰りした

<p>九大教授 理學博士 綱 綱 理 一 郎 著</p> <p>生 理 植 物 學</p> <p>増訂8版 B5判特製896頁挿畫365圖 價10圓・〒45</p>	<p>最新刊 地方農林技師 前 田 將 著</p> <p>柑 橘 ・ 枇 杷 定價2圓50錢 送料 21 錢</p>
<p>畜産試験場技師 農學博士 芝 田 清 吾 著</p> <p>畜 産 學 原 論</p> <p>増訂5版 A5判644頁 挿畫193圖 價7圓50錢・〒33</p>	<p>最新刊 兵庫縣農事試験場 大 澤 仲 三 著</p> <p>桃 ・ 柿 ・ 栗 附梅・李・胡桃 ペカン 定價2圓50錢 送料 21 錢</p>
<p>農林省農試技師 石山信一・向井秀夫共著</p> <p>植 物 病 原 細 菌 誌</p> <p>最新刊 B5判特製820頁 挿畫256圖 價15圓・〒45</p>	<p>最新刊 群馬縣勢多農林 久 田 精 之 助 著</p> <p>自 釀 要 訣 醬 油 ・ 味 噌 定價8圓50錢 送料 21 錢</p>
<p>東京帝大教授 農學博士 丹 羽 册 三 著</p> <p>蔬 菜 栽 培 之 技 折</p> <p>最新刊 B6判 紙裝 82頁 價 35錢・〒 3 錢</p>	<p>最新刊 鹿兒島高農教授 玉 利 長 助 著</p> <p>造 林 業 務 提 要 定價2圓50錢 送料 21 錢</p>
<p>東京帝大教授 農學博士 丹 羽 册 三 著</p> <p>實 驗 記 錄 家 庭 廿 坪 菜 園</p> <p>最新刊 B6判 紙裝131頁 價60錢・〒 6 錢</p>	<p>最新刊 地方農林技師 磯 谷 銳 著</p> <p>改訂 蠶 種 製 造 實 務 要 覽 定價2圓50錢 送料 16 錢</p>
<p>増訂 7版・新裝版 千 島 喜 久 男 著</p> <p>畜 産 學 粹 改 訂 版 定價1圓80錢 送料 15 錢</p>	
<p>最新刊 農林省畜産試験場編</p> <p>畜 産 試 驗 場 年 報 第 7 號 定價 98 錢 送料 1 錢</p>	
<p>發 兌 東 京 市 神 田 區 錦 町 一 丁 目 四 番 地 明 文 堂 振替東京13190番 (最近圖書目錄送呈) (送料三錢要す)</p>	

り、其の頃は校友會雜誌を卒業生へも送付して居て、其の編纂や又獨創的なる事業の企畫等をして居た、文藝部主催の繪畫展覽會を附近の中小學校生徒の作品を募つて紡績科の製圖室を借り受けて開催したり、繪葉書を作つて校内運動會當日賣出して好評を博したり等は其の考案の實現であつた。辯論會に於て常に新鮮な材題を求め、上田公會堂で地方青年辯論大會に於て(確か)時代精神と云ふ演題で熱演をした冬の夕もあつた。

正木君は明晰なる頭腦を有し、何をしてもきちんとしてよく處理し吾々十六クラスでは特徴ある存在であつた。生絲検査所では調査部の事務を擔當し所内でも有視せられ、勤務の餘暇を得て歌作にも精進され、蠶絲業關係の雜誌に時々諸種の事柄を纏めて發表して居るのが見られた、然し惜しむべし病に倒れ昭和十三年同所を退職するに至つた。當時旅行の序横濱に正木君の家を見舞つた、日當りのよい部屋に只管奥様の心細やかなる看護を受けて居た。寢た儘で動けない枕元には、(一)餘り近寄らないでください(二)成るべく話しかけないでください(三)話は手短かに願ひますと云ふ自筆のペン書の紙片がヒンで止めてあつた。常に心中を整頓して置く正木君の面目が確如として居り思はず眼に海關のかがれる思ひがし深く胸打たるものを感じた。噓かに眺め乍ら感激の涙を光らせて居た。噓々何で舊情に歳月の隔たりがあらう。爾來病と闘ふこと幾星霜、クラス有志の暖かき友情も寄せられた。されど根強く喰ひ込んだ病魔は遂に彼正木君を立たしめず、若くして特徴ありし英才は大東亜共榮團建設の響きを聞き乍ら榮光ある御代に別れを告げ菊の散る晩秋永遠に埋もれ去つた。永い病床生活に培はれた思想、高趣の進境を偲ぶと共に必ずや次の世に立派な健康體を持つて再び生れ還り天性の才能を思ふばかり伸展されん事を祈るものである。

編輯室より

△本會報第十二號は會員名簿號として發行したのであるが、會員の中には名簿號とは別に會報が發行されると思はれて「十二號が屆かぬ」と言はれる方があつた。今後は名簿は會報の特別號として出る譯であるから御承知置き願ひたい。

△十二月は卒業線上で何かと忙はしく、亦大東亜戦争の興奮裡に忽ち日は過ぎて會報も迎れて申譯なし。

△本號には本會總會記事及會計表があるが紙面の都合で少々省略したので、詳細知りたい方は本會宛御照會を乞ふ。

原稿募集

資源難と經費高に依つて豫算の關係上餘儀なく過去三ヶ月間多數各位の不滿を浴びる程本誌数を縮少しておました。が之は前にも申上げて置きました様に一時的のもので、再び増頁致します。就きましては研究調査記事でも論説でも隨筆でも結構です。澤山御投稿を願ひます。

編輯室

昭和十七年一月廿二日印刷 (非賣品)
昭和十七年一月廿五日發行

編輯 上田蠶絲專門學校内
發行 小松 忠 一 郎
印刷 上田市原町五七九五 二 郎
印刷 上田市原町五七九五 二 郎
印刷 上田市中澤 印 刷 所

發行所 上田蠶絲專門學校内
法人 千 曲 會
電話 上田四〇六番・六六一番
振替口座 東京四三三四一
長野口座 長野六二四三番